

---

# 日本国内におけるイエスズメの分布拡張

---

長野市 佐野 昌男

---

## はじめに

世界にはこれまで15種類のPasser属の生息が認められており、日本ではスズメ (*P. montanus*) とニューナイスズメ (*P. rutilans*) の2種類が生息している (日本鳥学会, 1974)。一方、長い間ヨーロッパ大陸に生息していたイエスズメ (*P. domesticus*) は、19世紀初頭になって、シベリア開発によるコムギ栽培の東進を追って、ウラル山脈東部を飛び越え (Summers-Smith, 1988)、1929年にはさらに東へ分布を広げ、ヤクーツクよりハバロフスクに達した (Flint et al., 1983)。また、アムール河上流に達したイエスズメは、1933年から1949年にかけてアムール河沿いに東進し、ハバロフスクから河口の町ニコラエフスクナアムールに達した (Vorob'ev, 1973) という報告や、1910年にイルクーツクに達し、1932年にはニコラエフスクナアムールに達した (Long, 1981) という報告もある。

ニコラエフスクナアムールに到達したイエスズメのその後の動向は不明だったが、私はこれらのイエスズメの中にはサハリンに渡り、そこからさらに南下しサハリンの最南端に達し、やがて北海道の稚内へ渡ってくるものと予想していた (佐野, 1975, 1982, 1988)。

1990年8月、私は利尻島の鴛泊で予想していた通り、イエスズメの雄1羽と若鳥2羽を発見した。若鳥の発見により、繁殖の可能性も出てきた。そこで、北海道の日本海側におけるイエスズメの分布状況と繁殖を含めた生息状況を明らかにすることを本研究の目的とした。

なお、この調査に当り、京都大学大学院理学研究科教授の山岸哲さんには多大なご指導をいただいた。さらに北海道の調査地の一つ積丹町来岸の佐藤領江子さんには、調査の便宜をいろいろとはかっていただいた。また、スズメの捕獲については北海道庁経由で、環境庁から迅速な許可をいただいた。そして、積丹町来岸の現地においては北海道環境科学研究センターの梅木賢俊さんには実際の捕獲

の場面で、献身的なご協力をいただいた。これらの方々には心より御礼申し上げる。最後になったが、本調査の機会を与えていただいたTAKARAハーモニストファンに感謝する。

## 調査場所ならびに調査方法

図1に1990年の発見以来、今日までイエズズメが確認された場所を示した。図を見ても分かるように、これまでの確認場所は全て日本海側に限られている。そこで、今回具体的な調査で訪れたのは、図に示した既にイエズズメの生息が確認されている利尻島、札文島、積丹町、まだ生息が確認されていないが周辺の状況から、生息が予想されている糸魚川市、富山市周辺、金沢市周辺などである。

調査は、主に“ライン・トランセクト・センサス”法で行なった。また、餌付けをされていて、長時間その場所に留まっているときは、定点観測法を用いた。

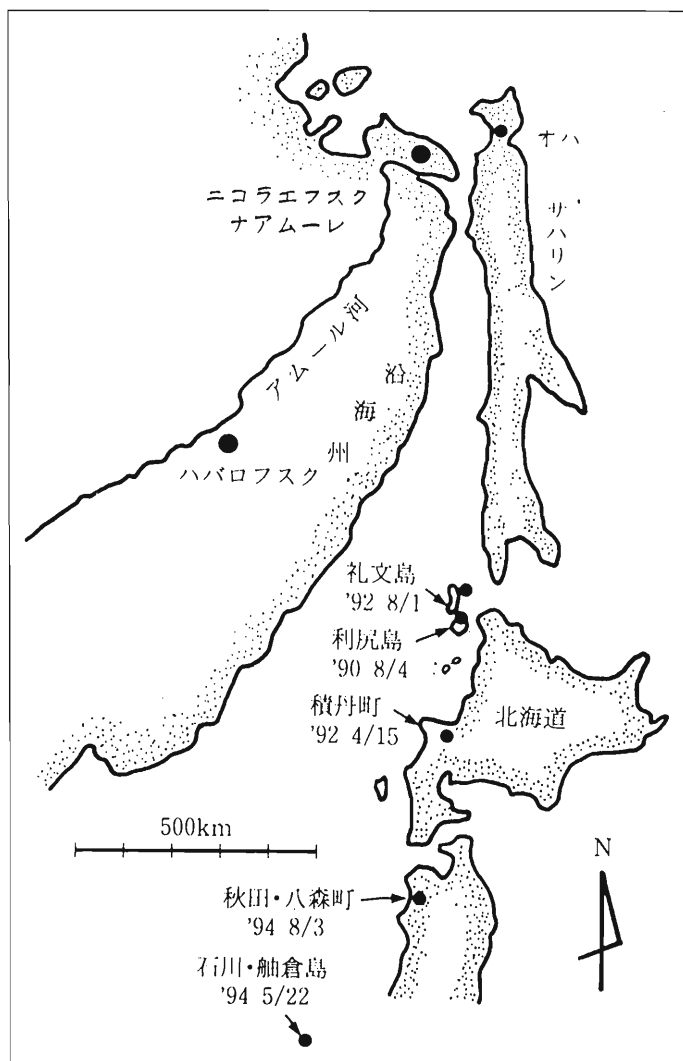


図1 日本およびその周辺におけるイエズズメの生息地

## 調査結果と考察

表1に、わが国におけるこれまでのイエズズメの生息確認状況をまとめてみた。これらの結果をみると、それぞれの地において、イエズズメがほぼ定着していることが分かる。以下、具体的に説明してみたい。

●北海道利尻島

鴛泊：鴛泊は利尻島の玄関口にある、島内で一番大きな集落で、港周辺と台地の上部の二つの集落に分かれている。1990年8月4日、日本で初めて私によってイエスズメが発見された場所でもある。表1にもあるように、成鳥の雄1羽と若鳥の雌2羽を上の方の台地の集落で発見した。若鳥を発見したことから、ここでは既に繁殖をしている可能性が強く、事実これより2年も前から土地の人の中にはイエスズメの雄を突然変異をしたズズメと解釈して餌を与えていたようである。発見をした後、今回の調査までの間にも地元の野鳥研究家の小杉和樹さんや利尻町立博物館の佐藤雅彦さんや私など、多くの人たちが観察している。これまでの

表1 わが国におけるイエスズメの生息状況

観察年月日	北海道利尻島	北海道礼文島	北海道積丹町	石川県	秋田県
'90 8/ 4	鴛泊 成鳥雄1 佐野				
'90 8/4-7	: 若鳥雌2 :				
'90 11/24	: 成鳥雄1 小杉				
'90 12/12	: 成鳥雄1 :				
'91 1/ 1	: 成鳥雄1 :				
'91 1/15	: 成鳥雄1 :				
'91 8/10	鬼脇 雄1 村上				
'91 10/ 2	: 成鳥雄1 :				
'91 10/20	: 成鳥雄1 :				
	: 若鳥雄1 :				
'91 10/31	鴛泊 雄1 佐藤マ				
'91 11/ 2	: 成鳥雄1 小杉				
	: 若鳥雄1 :				
'91 11/ 9	: 成鳥雄2 小杉				
	: 若鳥雄1 :				
	鬼脇 成鳥雄1 村上				
	: 若鳥雄1 小杉				
'92 3/ 下	→		→ 来岸 成鳥雄1 佐藤		
'92 4/22	鬼脇 成鳥雄1 村上				
'92 5/ 2	鴛泊 成鳥雄3 佐野				
'92 5/ 4	鬼脇 成鳥雄1 :				
	: 成鳥雄2 村上				
'92 5/ 4	鴛泊 成鳥雄4 佐野				
'92 7/30	杵形 成鳥雄1 :				
	鴛泊 成鳥雄5 :				
	鬼脇 若鳥雌1 :				
'92 8/ 1		香深 若鳥雄1 佐野			
		船泊 若鳥雌3 :			
'92 8/ 7	→		→ 来岸 成鳥雄1 佐野		
'92 9/20	→		: 若鳥雄1 佐藤		
'92 10/20	杵形 成鳥雄1 志摩				
'92 11/24	鬼脇 成鳥雄1 小林				
'94 5/22	→			→ 船倉島 成鳥雌1 新井	
'94 8/ 3	→				→ 八森町 成鳥雌1 佐野
'94 12/ 下	鬼脇 成鳥雄1 村上				
'95 8/ 1	鴛泊 成鳥雄1 佐野				
	: 若鳥雄2 :				
	: 若鳥雌4 :				
'96 8/ 2	鬼脇 成鳥雄3 :				
	: 若鳥雄5 :				
	: 若鳥雌1 :				
'96 8/19	→		→ 来岸 成鳥雄1 佐野		
			: 若鳥雄2 :		
			: 若鳥雌4 :		

調査の中で、同時に最も多く観察できたのは1992年5月4日の成鳥4羽と同年7月30日の成鳥5羽であった。

今回のこの調査では、港で餌付けをしてる売店前に常に40羽近いスズメの群れがいて、その中に成鳥の雄1羽と若鳥の雄2羽と若鳥の雌4羽を観察している。成鳥の雄は写真1を見ても分かるように、咽喉の下の黒斑がスズメと異なり、胸部へかけて大きくエプロンをしているように広がっている。また、頭頂部には明るい赤褐色の中に灰色の羽が混ざっている。ところが、ヨーロッパなどで見るイエスズメの雄は頭頂部の灰色はベレー帽をかぶっているように巾が広い。また、目尻の部分に白点があるが、この個体にはそれがない。その上、ヨーロッパで見るイエスズメの雄には頬に黒斑はないが、この個体には色は薄い黒斑がある。要するに、この個体はイエスズメの雄の特徴とスズメの特徴の両方を持っているのである。

写真1



写真2

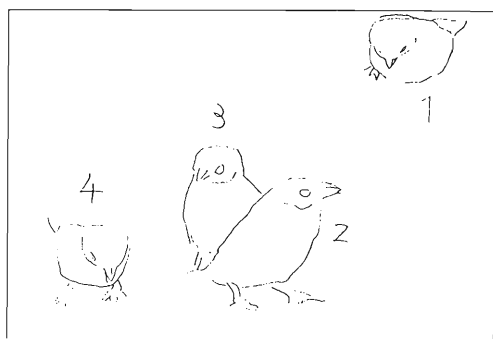


図2 写真2の説明図

写真2は写真1の雄と同じ場所で、路上にまかれている餌を求めて集まってきた群れである。図2にこの写真の個体番号をつけたので、これによって説明してみたい。写真を見て明らかなように1と4の個体に黄褐色の明るい眉斑がある。この眉斑はイエスズメの雌にはあるが、スズメにはない色斑である。イエスズメにはない頬の黒斑があるので、スズメの特徴を備えた雌タイプの個体らしい。2と3の個体はあまりはっきりと表れていないが、目尻にうっすらと白点が認められるところから雄タイプらしい。

鬼 脇：この集落にイエスズメの生息を確認したのは地元に住む村上将示郎さんである。それは1991年8月10日で、その後もこの集落に生息するイエスズメを前述の小杉さんや村上さんや私によって、連続的に観察している。ことに注目されるのは、1992年4月22日に初めてイエスズメの雄とスズメの雌（交尾時、下にいたので分かる）が交尾をしているところを村上さんが見て、それを写真に収めたことである。具体的な繁殖の事実と交雑の可能性が初めて出てきたのである。この段階で、鬼脇での生息は雄2羽、雌の若鳥3羽が認められた。

今回の調査では、集落のはずれで餌付けをしているお寺の庭と集落の中で成鳥の雄3羽と若鳥の雄5羽を観察した。いずれも、前述したようにイエスズメとスズメの両種の特徴を備えた個体である。

沓 形：この集落は利尻島で2番目に大きな集落であるが、鴛泊と鬼脇でイエスズメの生息が確認されても沓形ではそれまで発見されていなかった。1992年7月30日に私が雄1羽を発見した後、地元に住む志摩進さんが庭の給餌台で採食しているところを観察し、写真に収めた。

今回も集落内を延べ3.3km調査したが、調査が不十分でイエスズメは発見されなかった。

#### ●北海道札文島

香 深：地元で土産店を営んでいる加藤俊二さんは、1989年の冬あたりから模様の変なスズメがマヒワの鳥籠の下で餌を食べているところを見ている。私が利尻島でイエスズメを発見した新聞記事を見て、このスズメがイエスズメであることを知ったという。その後、姿を消したようで、私が1992年の夏に調査したときも観察できなかった。しかし、港のそばの集落内で若鳥の雄1羽を観察した。今回の調査では、集落内を延べ4 km調査したが、発見できなかった。

船 泊：1992年8月、若鳥の雄を3羽観察した。今回は集落内を延べ1.8km調査したが、発見できなかった。このほか島内の集落内を延べ6.4km調査したが、発見できなかった。

#### ●積丹町来岸

1992年3月、当地の佐藤領江子さんが庭の給餌台で採食しているイエスズメの雄を発見し、写真に収めた佐藤さんの観察により、雄が2羽いることが分かった。私もその年の8月に来岸を訪ね、確認した。その後、この雄とスズメがペアを組んで、毎年繁殖をしている。ただし、これまで2巣同時に発見されたことはない。これらのイエスズメの雄も若鳥も、また雌もヨーロッパで見るような典型的なイエスズメ、秋田県八森町や石川県舳倉島で発見したような典型的な雌は、

生息していないようである。写真3は来岸で捕獲した中の1羽である。くちばしや羽毛の状態から、この年に生れた若鳥である。注目されるのは、目尻に白点があることと頭頂部に灰色の羽毛がありイエスズメの雄の特徴がある一方で、頬に黒斑がありスズメの特徴もあるところである。

今回は、これまで各地で発見されるイエスズメとスズメの交雑種と思われる個体をDNA鑑定するため、捕獲を試みた。捕獲した中から、具体的には表2に表した個体から採血した。現在、鑑定中であるため、結果はまだ出ていない。

●石川県舳倉島……1994年5月22日、長野市の新井清雄さんが同島を訪れていたとき、イエスズメの雌を発見し、写真に収めた。誌面の関係で写真は省略するが、イエスズメの雌の典型的な色斑である。このほかに渡来していないか島の中を探したが、この雌が1羽だけのようだった。

この島には、度々スズメが上陸するが一時的に滞在するだけで、これまで島に住みついて繁殖にまで至ったことがない。したがって、このイエスズメも本州に渡って、スズメとペアを組み、繁殖をしている可能性が大きく、周辺の日本海沿岸の集落を調査してみた。

金沢市周辺：6月中旬、金沢市街地と郊外、また能登半島の日本海側の集落を車を利用して羽咋市近くまで探したが、発見されなかった。

糸魚川市：ここは日本海に面した標高の低い町で、ニューナイスズメが市街地で繁殖していることで知られており、以前も何回か調査に訪れている。不思議な町で、もしかしてイエスズメが発見されるのではないかと思い、9月中旬に訪れてみた。イエスズメは発見されなかったが、これまで九州にしか生息していなかったカササギが3～4年前に発見され、そのカササギを3羽観察した。このカササギは多分、季節風に乗って、大陸から到来したものと思われる。北海道から本州の日本海側で発見されるイエスズメのルーツを考えるのに大いに参考としたい。

富山市周辺：11月初旬、富山市街地と郊外、また前回の金沢市周辺調査とは逆に能登半島の富山湾側の集落を車を利用して回ってみたが、イエスズメは発見されなかった。

## おわりに

日本で3種類目のスズメ属のイエスズメが発見されてから、本年で7年目を迎えようとしている。その間、北海道の日本海側から、本州の日本海側でも発見されるに至った。私はこれらのイエスズメがサハリンを南下して北海道北部へ

渡り、さらに南下し本州へ渡ったものと考え、稚内から天売・焼尻島を含め、積丹半島までの間の集落、さらに奥尻島の間にはイエスズメが入り込んでいないか調査を進めてきた。また、青森県と秋田県の日本海側の集落の調査も進めてきた。しかし、それらの集落でイエスズメを発見することができなかった。一方、最近サハリンへ渡った人たちの報告によるとサハリン最北の町オハにはイエスズメが認められたが、それ以南の都市には全く認められなかった(福田, 1991; 石城, 1992; 藤巻, 1993)。もちろん、サハリン南部にある最大の町で州都のユジノサハリンスクにもイエスズメが認められなかったとのことである。このことから、日本で発見されているイエスズメは季節風に乗って、直接日本海を飛び越えて入ってきたものと考えられる。

したがって、その数は散発的なもので、イエスズメだけで群れを構成することができず、集落へ入ってきたイエスズメはスズメとペアを組まざるを得ず、ここに交雑が行なわれるものと思われる。

交雑の問題は外形から判断しても解決には至らない。そこで、DNA鑑定を取り入れながら、本調査を進めているが、解決に至るまでにはさらに時間を要するのが現状である。

一方、これらの交雑個体が、これからどのように発展していき、イエスズメの群れを日本に定着させるのか、あるいはこのまま消滅していくのか、非常に興味深い問題である。もし、集落がイエスズメに占領されたとき、これまでいたスズメのゆくえ、さらにその外側にいるニューナイスズメのゆくえは、どうなるのであろうか。

今後の調査に待ちたい。

## 引用文献

- 1) Flint, V. E. et al (1963) : A field guide to birds of the USSR. Princeton University Press, New Jersey, pp-294~297.
- 2) 藤巻裕蔵 (1993) : Urban Birds 10 (1) : 42
- 3) 福田道雄 (1991) : Urban Birds 8 (1) : 45~47
- 4) 石城謙吉 (1992) : 北大農学部演習林研究報告45 (2) : 363~374.
- 5) John L. Long (1983) : Introduction Birds of the World : 374~383.
- 6) 日本鳥学会 (1974) : 日本鳥類目録, 学習研究社.
- 7) 佐野昌男 (1975) : 雪国のスズメ, 誠文堂新興光社, 東京, 226pp.
- 8) —— (1981) : 山と樺物館, 26 (3) : 4.
- 9) —— (1988) : アニマ, 115 : 28~34.
- 10) —— (1992) : スズメ 人里の野鳥, 長野, 信濃毎日新聞社, 218pp.
- 11) Summers - Smith, J. D. (1988) : The SPARROWS. CALTON, T. & A. D. Poyser. pp.114~161
- 12) Vorob'ev, K. A. (1973) : ウスリーの鳥 (下). YANAKO, たたら書房, PP.283~284

表2 捕獲・採血・放鳥個体（来岸にて）

リング・ナンバー(右足)	左足	備考	
3C-22845	なし	雌成鳥	DNA
3C-22847	なし	雌成鳥	DNA
3C-22853	なし	雌成鳥	DNA
3C-22856	なし	若鳥	写真 眉斑、目尻白点 DNA
3C-22857	なし	若鳥	写真 頭部灰褐色 DNA
3C-22858	赤	若鳥	写真 眉斑、目尻白点 DNA
3C-22859	桃	若鳥	写真 眉斑、目尻白点 DNA
3C-22860	黄	若鳥	DNA
3C-22861	紅	若鳥	廃棄
3C-22862	縞(青白赤白青)		
3C-22863	青	雄成鳥	廃棄
3C-22864	縞(緑白青白緑)		
3C-22865	縞(白赤桃白赤)		
3C-22866	緑		
3C-22867	縞(赤白青白赤)		眉斑、目尻白点
3C-22868	縞(黄桃白桃黄)		